

リアルが活きる！ 道徳が動き出す！



安波祭で田植踊を奉納する横山さん
(2024年)

よこやま わかな
横山 和佳奈さん
(東日本大震災・原子力災害伝承館 職員)
スペシャルインタビュー



震災の記憶と故郷の伝統を
風化させないために――
伝え続ける仕事をしたかった

動画は、この教材の学習に対応しています。

2年28 伝えるということ

教科書 p.150 ~ 153

内容項目 C 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度

主題名 郷土の文化を継承する

地元を大切にしてほしい

筆者の横山和佳奈さんは、大学卒業後、故郷の浪江町にほど近い東日本大震災・原子力災害伝承館（福島県双葉町）に勤務されています。「普通に学校に行って、家に帰って家族と過ごす、そんなあたりまえだと思っていたことが災害をきっかけに全てなくなってしまう」。そんな経験をされた横山さんに、震災の記憶や田植踊を「伝えるということ」に対する思いを伺いました。

ふるさとの伝統である田植踊を風化させないために、「誰かが伝えていかなければ」という思いで活動をしているという横山さん。その一方で、「震災当時のことを思い出すのは楽しいことではないけれど……」とおっしゃっていたのが印象的でした。被災したかたがただでなく、みんなで考え、伝え続けていかなければと改めて感じました。（編集部N）

横山さんにお会いしてきて

ひとめでわかる！ 動画の流れ

- 横山さんの紹介 (00:07～)
- 東日本大震災の後にはどのように過ごしてきましたか？ (00:40～)
- 原子力災害伝承館で働こうと思ったのはなぜですか？ (01:29～)
- 震災について伝えるときに意識していることはありますか？ (02:11～)
- 請戸の田植踊を守るためにやっていることはありますか？ (03:10～)
- 目標にしていることはありますか？ (03:34～)
- 横山さんから中学生へメッセージ (04:48～)
- 再建された若野神社や、13年ぶりに社殿の前で行われた「安波祭」の様子 (06:25～)

横山さんが働く
東日本大震災・
原子力災害伝承館



2024年に再建
された若野神社
(福島県浪江町)

地元を離れた経験がない生徒たちにとって、郷土愛について自分ごととして考えるのは少々難しいかもしれません。そこで、生徒と教材の距離をぐっ！と縮められるのが動画資料です。横山さんは「伝統の田植踊を絶やしてはいけない」という強い信念のもと、多くのメディア取材にも応じているので、それらも上手に活用したいですね。

福島県郡山市立郡山第三中学校
星 美由紀 先生



動画コンテンツ活用のご提案 /

私ならこう使う！

1 授業の前にひと工夫！

中学生へのメッセージの中で、横山さんは「自分のふるさとにどんな思いをもっていますか？」「地元にある文化や伝統芸能、どのくらい言えますか？ 参加していますか？」と問いかけています。これらについて、授業前にアンケートを行い、結果をワードクラウドにしたり、導入の意図的指名に活用したりしてはいかがでしょうか。

授業の終末に横山さんからのメッセージを視聴したあとで再び同様の問いを投げかけ、授業前の考えと比較させることで、考えを深めることができます。

2 展開では、写真資料も活用しよう

伝承館のすぐ近くには、横山さんが被災した浪江町立請戸小学校が震災遺構として残されています。黒板にはたくさんの方の励ましのメッセージが書かれており、公式サイト等か

らも見ることができます。その中に「やっと請戸これだ！踊りががんばるよ!!」の言葉。放射線の影響から15歳未満は立ち入れなかった母校に、震災後初めて足を踏み入れた横山さんが2014年3月に書いたメッセージです。この黒板の文字からも、横山さんの思いが伝わってきます。故郷の伝統に関わっていききたいという強い気持ちがどこから来るのかを考える際にも、視覚資料として活用できます。

3 動画の視聴は、展開後段で！

横山さんが伝承館の語り部になっていることは、展開の後段まで生徒たちに伏せておきます。作文を書いた当時の横山さんは高校生。それから約10年がたち「大人になった横山さんはどうしていると思う？ 今も踊りを続けている？」と生徒に投げかけたあとで動画の冒頭を視聴することで、生徒は驚きとともに、横山さんの信念の強さに気づくことができるでしょう。

学びを深めるひと工夫 NHKアーカイブス「伝統の踊りを守る」は、地震や原子力災害で一変した環境下でも田植踊の伝承に懸ける横山さん（当時19歳）の歩みを取材した4分半の映像です。授業前に視聴することで、教材への理解が深まります。

